

諦觀錄
『四教儀』序說

—成立意義と問題点—

池田魯參

高麗沙門諦觀（一九七一）が著わした『四教儀』は、天台教判を説く概論書として、広く一般に知られ、後世に及ぼした影響は非常に大きなものがある。その意味で、『四教儀』は、来るべき趙宋天台の教學興隆の夜明け前に成立し、極めて象徴的な役割を果たしたといえる。

そこで、本論では、『四教儀』成立の状況と、その教判論の特色について、今日的な課題から、改めて照明を与え、近年の学会で問題にされている一二三の問題点を解明したいと思ふ。

志盤は、『四教儀』成立のようすを、『仏祖統紀』(一二六九)卷一〇所載の、諦觀伝のなかで、次のように伝えている。

という。諦観は、かくして吳越の地に至り、螺渓義寂の講授を善くすることを聞き、往いて参謁した。義寂に一見するや、諦観は心から服し、遂に礼して師事することとなつたのである。⁽⁴⁾ 諦観は嘗て製した『四教儀』を篋に藏していたが、知るものはないなかつた。螺渓に留まること十年したある日、諦観は坐亡した。故人の篋が光を放つので、開けて視たところが、此の書が藏されていた。かくて、『四教儀』は、盛んに諸方に伝えられ、初学の蒙を発く資助として、後に大いに行なわれるようになつたのである。

志盤のこの伝記には、『四教儀』の巻数を明示しないが、卷二五（同二六〇b）山家教典志には、「四教儀一巻」と出る。この点について、明万暦九年（一五八一）に、智覚が記す「四教儀縁起」（大正四六・七七四a）は、本書は元来は上下二巻本であったと伝える。彼にしたがうと、上巻は一家の判教立義を明し、下巻は南北諸師の宗途異計を明したものであつたが、孤山智円（九七六一一〇二二）が、本書を校勘し刊板するに際し、下巻は緩なるもので、初学者を益すところが少ないとして削り、辞句簡要にして、義旨易明な上巻のみを刊行した。本書の巻末に「自從此下略明諸家判教儀式耳」と結ぶのは、その辺の消息を伝えるものである、というのである。

今、智覚が伝えるところが何のような証拠を踏まえるのか検することはできぬが、翌年（一五八二）の譲になる、馮夢楨の「刻天台四教儀引」も同説を紹げる。

智円にそのような事実があつたかどうかを徵する余裕が、ここにないのは遺憾であるが、智覚の伝承が正しいとすれば、智円によつて『四教儀』が板行されたことが知られる。

ところで、儀の三大註として、その劈頭を飾る、従義（一〇四二一一〇九一）の『天台四教集解』の「序」（続蔵二編七套一冊一 a）によれば、従義は「治平四年（一〇六八）に妙果寺において、雪川の科に拠つて、諦観録を消釈し、三巻を成し、何晏の『集解』、杜預の『集解』にならい、『四教集解』と題した。しかるに、熙寧九年（一〇七六）大雲西院において、講訓の余、雪川の科を考覈したところ、善美を尽すものでないことを知り、遂に科文一貼を著し、改めて疇昔の集解を検校したところ、頗る疎略な処があつたから、重ねて修飾し三巻を成したのである」と記している。

従義が初め範として用いた雪川の科とは、仁岳の科文のことである。雪川は仁岳の出身の地名（浙江省吳興県治南）である。仁岳は、初め知礼に学び、師説を高揚したが、夢に感じて、後に知礼の教説に對し異議を唱えるにいたる。その意味で教学史において極めて悲劇的な役割を荷負つた人物であるが、志盤は、統紀からは異端のものとして、雑伝の筆頭に彼を掲げる。その仁岳（九九二一一〇六四）が『四教儀』を研究し、科本を著わしたということは注意してよい。そして仁岳同よう、知礼教学に批判的であつた、雑伝派に伝えられる從

義が、仁岳の科本によつて、四教儀研究の緒についたことになる。⁽⁵⁾

因みに、遵式（九六四—一〇三二）は「天台教隨函目錄并序」のなかで、「立^ニ五時八教、判^ニ釈西來一切經籍、罄無^レ不^レ尽」（続藏二編六套二冊一三三二b）と記すが、恐らくこの文は、「四教儀」卷頭の「天台智者大師、以^ニ五時八教、判^ニ釈東流一代聖教、罄無^レ不^レ尽」の文を下敷にするものと思われる。遵式の著述のなかで、「五時八教」と表詮する例は、この一例のみであるが、それだけでもこの推定は事実に近いものと思われる。⁽⁶⁾

このように、「四教儀」は、諦觀の寂（九七一）後、まもなく智円（一〇二二）・遵式（一〇三二）・仁岳（一〇六四）・從義（一〇六八）などによって研究されたことが知られ、これらの人たちによる『四教儀』に対する関心と、その研究動向が、やがて從義の『集解』（一〇七六）、元粹の『備釈』（一三一四？）蒙潤の『集註』（一三三四）の三大註を生み出す氣運をつく、しだいに教判研究における諦觀録『四教儀』の教權を定着させていくのである。

1 諦觀の当時ににおける、高麗国における天台学研究の状況については、鈴木覺心著「朝鮮天台に就て」（『山家学報』九号・昭和九年）を参照されたい。又、李能和著『朝鮮佛教通史』下編（大正六年）二九五頁以下、忽滑谷快天著『朝鮮禪教史』（昭和

五年）一三七頁以下を参照。

2 この点について、「後半の奇瑞説はとにあれ、本四教儀で經典以外に典拠を記さない著者が、一ヶ所のみ「永嘉大師云、同除四住（法華玄義五上・大正三三・七三七a）」の文を引用し、この疑問を解釈している点からみても、右のいきさつは事実に近いとみてよからう。」（塩入良道「天台四教儀解題」「國訳一切經」和漢撰述五七所収参照）と考えられる。志盤は、「述曰、吳越王、杭^レ海取^レ教、實基^ニ於同除四住之語、及觀師製^ニ四教儀^ニ、至^下明^ニ円教中^上、故特標^ニ永嘉^ニ云者、所^レ以寓^ニ當時之意^ニ、俾^レ後人無^レ忘^レ發起^甲也」（大正四六・一〇六b）と評する。

3 遣使求書については、諦觀伝の外に、『宋高僧伝』卷七、義寂伝（大正五〇・七五二）、『景德伝燈錄』卷二五、徳韶伝（大正五一・四〇七）、『仏祖統紀』卷八、義寂伝（大正四九・一九〇）、同卷一〇、吳越忠懿王錢弘俶伝（同二〇六）、同卷四三、法運通塞志（同三九四）、『釈門正統』卷二、義寂伝（続藏二編二輯乙三套五冊・三八一a）、『善隣國寶記』卷上、冷泉院永觀元年の条、楊文公の談苑の説『続群書類聚』卷三〇上・三三二に出、吳越については『五代史』卷六七に載する（『仏書解説辞典』所載、田島徳音「四教儀」の項参照）。智覺述「縁起」には、贊寧（九一八—九九九）通惠錄云」として、引く。

4 義寂の門には、同じく高麗国人であった義通（九二七—九四八）がある。義通の入宋は、後晉天福年中（九三六—九四三）のことと、それは諦觀に先立つ二十有余年前のことである。入宋後諦觀は僅かに十年で逝ったが、義通は約四十五年間の化をした。義通の門下からは四明智礼、慈雲遵式の二神足を出し、

智礼下に広智、神照、南屏の三家が出、その法流は長く栄えたのである。その意味で、宋朝天台の興隆に果たした、義通や諦觀などに代表される朝鮮天台の歴史的役割は非常に大きなものがある。特に銘記したい。前掲鈴木覺心著「朝鮮天台に就て」を参照。

5 安藤俊雄著「雪川仁岳の異義—その哲学的根拠を中心として—」（昭和二七年稿、『天台学論集』昭和五〇年・平楽寺書店刊）を参照。仁岳の教判研究の実際について彼の著書のなかで検索する時間的余裕が本論ではなかつた。遺憾である。

6 遵式の著書に出る、教判に関する説は、ほぼ左の如きである。

○皇祖有訓以天台命家、總括群經誕數八教、引五時五味、以次其説、使頓漸有序施開成務、原始要終、實昭明乎大化、然後說三種止觀、教人安心、牢籠万行、巧適物宜、雖三不同、同御大車、到于涼池、大哉、自我不教東漸于夏、近二千載、以三大總持作師子吼、妙尽仏意者、始一人而已（『天台教觀目錄并序』『天竺別集』卷上・続藏編六套一冊一三〇d）

○玄義者、唯解首題、統明五時、広弁八教、出世大意蘊乎其中、若曉斯義、則七軸之文思過半矣（『天台教隨函目錄』同一三二〇）

○智者、於法華判教中云、前代諸師、或祖承名匠、或思出袖襟、雖阡陌縱橫、莫知孰是、然義不雙立、理不兩存、若深有

所以、復与修多羅合者錄而用之、無文無義不可信受、遂廣徵十家、謂南北七、即江南三師、河北七師、雖通依頓漸不定、以為教相上判、釈經論、或開為三四時、或張為六宗、有但為三相、有混作一音、異論紛然衆製鋒起、智者破之、則南北俱壞、取之則三七或存、皆文旨炳然、覽者如鑑、具如法華玄義第十卷、語人則盛破光宅、余者望風、語法則偏難四宗、他皆失拋、今略引天台四教與四宗比決、亦粗見優劣、按維摩玄義、問曰、天台四教義與他人四宗同不、答曰、若人問四大諦與四大同不、此云何答（此言四教雖齊其旨、今家不傍四宗、立教者、略出三妨、一者四宗名義言方似滯、謂彼不依四不可說、用四悉檀説、是以言則成滯也、二者細尋研覈義似不便、彼以三三假為不真宗、三假是世諦見、世諦未得道、何得以此立宗、成論明見空得道、何不以空為宗、彼又以不真宗為通教、真宗為通宗、何故不真俱名教不名宗、真宗名宗不名教、且教無宗、而徒設宗非教以何会、故不便也、三者四宗明義、若比古今、實為富博、一家住望摄仏法意、彼大有所闕、今天台采諸經論、立四教義、一教各有四門、四教合十六門、即是十六宗明義也、今將彼四宗、對今十六門、足見彼之所闕、何者彼因緣假名兩宗、似下与今三藏教空有二門相參、猶闕三昆勒門及非空非有門也、不真宗似下与今通教有門相參、猶闕三門也、彼真宗似下与今別教有門相參、猶闕三門也、四宗对今家前三教十二門、尚闕八門、円教四門彼所不明

為五宗、又似下与今円教有門相參、猶闕二十一門、耆闍法師、又

一五一 b)

加為六宗、彼常宗還似下与今別教有門相參、彼円宗還似下与今円教有門相參、彼真宗似下与今通教空門相參、猶闕二十門、況今一一四門又各攝無量法門、如小乘五百聲聞各說身因、是五百門祇是三藏三門所攝、余三門亦然、淨名三十二菩薩、各說入不二法門、乃至八千菩薩不出圓教四門之意、又推此校量彼大

有所闕、且直指教門名數不齊、大略如上、若更細論詮

旨、彼又恐不同也、今家四教、一一四門門各八義、理教智斷行位因果八義、束定生滅無生無量無作四教旨趣、坦然明白毫髮不

濫、豈同四宗立名無淮素拋無文、又況今通教因果、通後

別圓別入圓等、教理相入及所通之理、四四諦、七二諦、五三諦、

隨情智等、彼不聞名、況有其義、故法華玄文、約頓漸不定三

義判教觀二門、乃云今弁信法兩行明於教觀、各作三意、大

該仏法、歷前諸教、無有一科而不異諸法師也、若欲修

禪學道歷前諸觀、為法行人說安心法、無有一科與世間諸

禪師同上也、誠哉其言信不誣矣、已上略對四宗五宗六宗、校

量一家法門、大槩如此、若徧引諸家、廣論優降卒不可備
(答王亟相欽若問天台教書) 同一四八b—一四九a)

○次更略錄天台立教戶牖釈經方法、永異諸家、止觀第七云、又

今有三十意融通仏法、一明道理、寂絕亡離不可思議、即是四諦三諦二諦一諦無諦隨情智等、或開或合、若識此意、権實道理冷然可見、二教門綱格、匡骨盤峙、包括密露、涇渭大小、即漸頓不定秘密、藏通別圓、若將此意、声教開合化道可知(同

○教將東被先寄其人、羅什以訳梵成華、使言如仏口、智者乃約經敷義、以理尽仏心、一家之八教既揚、二京之百氏息唱、邈哉大化自此而彰、微言在茲(杭州千頃衆請淨智大師住持開講疏)同一五二b)

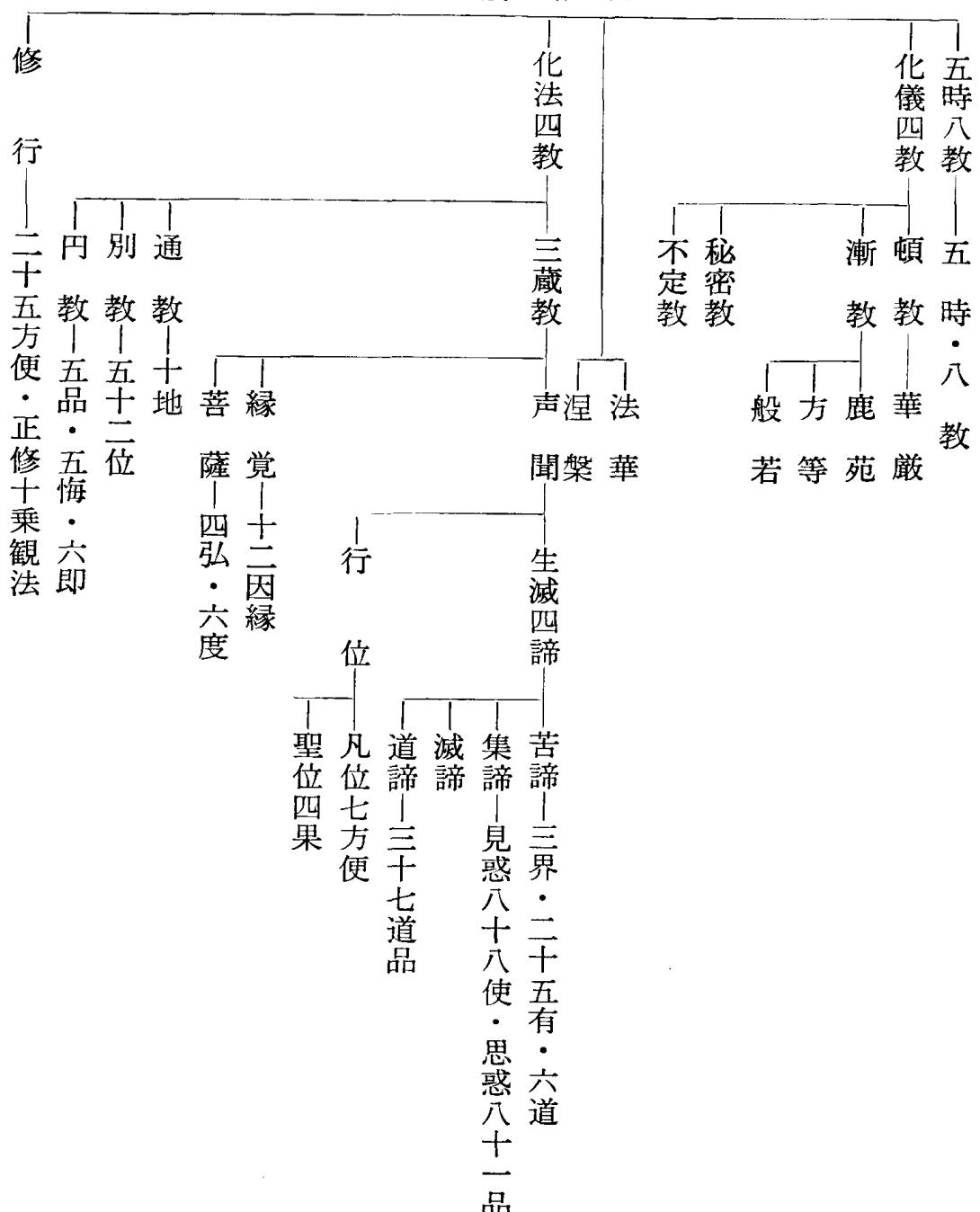
『金園集』等には教判説はみえぬ。

又、『注肇論疏』六卷(続藏二編一套二冊所収)は、「姑蘇堯峯蘭若沙門遵式述」とあり、上杉文秀は遵式の著述と判する(「天台宗典籍談」「日本天台史」続所収参照)。が、序文に「遵式幼從師授、虛己求宗、後因習學華嚴大經、常覩清涼判釈、盡開五教、取法古師、権實之旨有歸、行解之門可向」と記し、本文の解釈に入つても、賢首法藏の五教判によつて判じている(一〇〇d)などするが、天台教判については一言だにしない。恐らくは慈雲遵式の著書でないと思う。因みに、島地大等も、志盤も、遵式に本書があつたことをいわぬ。大方の御教授を頂きたい。

二

次に、『四教儀』の全体的な特色についてみよう。先ず、どのような構成であるかをみると、初めに、「五時八教」の名数を示し、次に、化儀四教を説き、頓教に華嚴を、漸教に鹿苑・方等・般若を説き、秘密教、不定教を明し、化儀四教を前四時に限る。その後に、法華涅槃を別出する。次に、化

四 教 儀 略 科



法四教について、三藏教・通教・別教・円教を説く。次に、修行が四教によつて起るとして、二十五方便と十乘觀法が略説される。そして最後に本書が『法華玄義』『淨名玄義』の抄録であると結ぶ。以下の論述に便宜をはかつて、『四教儀』の略科を示すと、上

は、諦觀が、天台教學の教判は「五時八教」で説き尽せると理解したことである。なぜなら、冒頭に「天台智者大師五時八教を以て、東流一代の聖教を判釈したもうに、罄きて尽きざることなし」と標榜し、巻末にいたつては、「謹んで台教の広本を案じて五時八教を抄録し、略して知らしむること此の如し」と結ぶこ

とによつて、そのことは強く印象づけられているわけであるから。

この点については、すでに論じたところであるが、天台学の教判論を「五時八教」という熟語によつて名指す仕方は、湛然教学に始まるもので、湛然以前ではなかつたところのものである。しかるに、一度湛然によつて指定されてみると、そのことはいかにも真当なものとして肯われ、湛然以後の研究者たちは常識として「五時八教」の呼称法に従つていたことが知られるのである。例えば、行満・明曠・道遅・智度・智雲・法聰・広修、あるいは『止觀科節』などにおいて、「五時八教」の牢固とした観念が存在した。⁽¹⁾

したがつて、諦觀における「五時八教」の観念は、当然のこととして、湛然とそれ以後の人たちの教判研究の伝統的な立場を継承したものであるといふことができよう。

この点に関連して、近年の学会には我が国で行なわれた教判論は、「五時八教」ではなく、むしろ「四教五味」ないし「四教五時」と呼ばれるような構造のものであつた、というような意見があるので、少しくこの点について考えてみたい。

例えば、義真（七八一一八三三）が弘仁一四年（八二三）に著わす、勅撰の『天台法華宗義集』では、教門として、四教義・

五味義・一乘義・十如是義・十二因縁義・二諦義を説き、觀門には四種三昧義・三惑義を解説しているが、説述の順序

が、四教義を先にし、五味義を後にしているだけではなく、序文において「四教五味を首先に居す所以は、此れ則ち一代の教網、一門の義府にして、余の法多しと雖も、此れ従り而出ず」と記すように、天台の教網は「四教五味」に尽くされるというのが、義真の見解であつたようである。

又、円珍（八一四一八九一）の作と伝えられてもいるが、多分源信（九四二一一〇一七）の撰であろうと考えられている『四教五時略頌』と、その注釈書として著わされた、作者未詳なるも、蓮実房勝範（九九六一一〇七七）の作と伝えられる⁽³⁾、いわゆる『西谷名目』は、具名を『天台円宗四教五時西谷名目』といい、当然のことであるが、その説述の次第は四教義に次いで五時義が表わされていることは、『四教五時略頌』の場合と一般である。

さらに、『戸隠名目』とも『津金寺名目』とも呼ばれる、尊舜（一四九二）御談の書名は、具には『天台円宗四教五時津金寺名目』と称する⁽⁴⁾。説述の次第はいうまでもなく、四教、五時と説かれる。ところで、『津金寺名目』は、今の問題について、次のような料簡を示している。

尋て云く。題の下の注に、又、五時八教と云う応しと云う意如何。

義に云く。題号に、四教五時の名目と云えるを、又は、五時八教の名目とも意得べき也。夫れを取り上下の題の不同如何と云に、

上は約教を本と為して、四教五時と云う。下は約部を本と為し、五時八教とも列る也。但し、五時の判教は、南三北七の諸師、大

都、之に同じ。古人既に無きは、四教判釈と云て、四教の分別は、天台の独立也。故に四教五時の次第を本と為す也（上巻四三左）。

知られるように、「四教五時」とい、「五時八教」といわないのは、約教の立場を重く視るからで、天台の独創になるのは正しく化法四教であるという理由による、と尊舜は説く。このような考え方は、化儀判を重視して、法華超八に帰結する教判説を正統の立場とした湛然教学のそれとは、自ら異なるものようである。このことは、例えば、『津金寺名目』が、『大部四教義』を盛んに引用し、『四教儀』を介さない、智顕自身の教判論に依拠しようとしている研究態度と、何らかの関連があるかも知れない。

ともあれ、我が国に行なわれた教判論は、伝統的に「四教五味」ないし、「四教五時」と名指されるようなものであつたことが知られる。しかるに諦観は、中國天台の、更にいえば湛然教学を踏まえるものとして、天台教判の總体を「五時八教」と標榜して憚るところはないのである。それだけではない。諦観において意図されていた天台教判の構想は、又、湛然門下の人たちによつて、かくあるべきものとは認されていたところのそれと、ほぼ同轍のものであつたということ

は、注意すべき点である。

1 この点については、すでに拙稿「湛然以後における五時八教論の展開」（『駒大仏教学部論集』六号・昭和五〇年）と、拙稿「湛然に成立する五時八教論」（『印度学仏教学研究』二四巻一号・昭和五〇年）において論じた。参照されたい。

2 関口真大稿「四教略頌」（『仏書解説辞典』所載）には、次のように記す。「安樂律勃興し、支那四明天台が移入され全盛となつてからは捨てられて顧る者も少くなり、諦観録にその地位を奪われた形であるが、併し彼に比してすら遙かに勝れたものであろうと信ずる。又、彼の『西谷名目』はこの略頌を骨格とし布衍して成ったものの如くである。作者は諸録に、一に智証大師、一に恵心僧都というも、諸種の事情より推定して恵心僧都と見る方がよいと思われる。」と説く。

因みに、『四教儀』の日本初伝が何時頃のことであるか、という問題は、にわかには決し難いが、重要な問題である。関口真大著「天台四教儀解説」（『昭和校訂天台四教儀』昭和十年・山喜房刊）では、「最初の伝来が何時であるかは詳らかでないが現存する最古の四教儀ではあるまいかと思はれるものに応永廿六年（一四一九）の版本があり、而もその跋には更に既に久しい以前から版行されていたことが記されている。併し乍らがて徳川時代に入つてから頓に盛に用いられるようになったものの如くである。」と記す。

私は、この点と関連して、略頌の教説内容を検討したところ、略頌は諦観録と何らかの交渉を有するらしいことを見出した

(拙稿「天台学における五時八教論—再び閔口説を論駁す—」)。

『曹洞宗研究員紀要』六号昭和四九年参照)。これは私の推定にすぎないのであるが、恐らく源信は諦観録をみたであろうと考える。なぜなら、略頌の解説の仕方は、形式的にも内容的にも、『宗義集』などのそれよりは、一層諦観録に似るからである。

源信並びに当時の叡山が、寂照等を介して、源清や、知礼、遵式などと親密な文化交流を持った歴史的事実を想い起す時、そのような可能性は充分に存すると考えられる。しかし、今は記録の上で確たる証拠があるわけではないから、推定の範囲にとどめる以外にはない。大方の御教示を頂戴したい。

3 塩入良道「四教儀解題」(『国訳一切経』和漢撰述五七巻所収)は、「天台円宗四教五時西谷名目(作者未詳なるも蓮実房勝範作と伝う)」と記す。

4 多田厚隆先生の御厚意を得て、先生所蔵の『津金寺名目』をお借し頂き、拝読することができた。又、津金寺(長野県北佐久郡立科町大字山部)については、塩入良道先生の御案内を頂き、今秋その古刹を訪ねることができた。望外の歓びとするところである。兩先生に心から感謝申し上げる次第であります。

5 『八教大意』を別にしても、例えば、湛然門下の、行満や法聰などの教判論は、諦観録の成立にいたる前段階のものとして、形式的な理解が示されている(拙稿「湛然以後における五時八教論の展開」参照)。例えば、行満の『学天台宗法門大意』は、天台教判は五時八教の組織に尽くされると説き、続いて、五時とは何か、八教とは何かを示し、三觀の運用に寄せて化法四教を示し、終りに涅槃法華の同醍醐を説いている。

又、法聰は、『釈觀無量寿仏經記』において、次のような図式的な教判論を説いている。

五時法合、初譬_ニ從_レ牛出_レ乳、即乳味對_ニ華嚴頓教、八教有_レ五、化儀有_レ三、謂頓秘密不定、化法唯_ニ一、謂別円、酪對_ニ修多羅_ニ第二味、謂_ニ四阿含經_ニ漸初、化儀有_レ三、謂_ニ小乘秘密不定_ニ化法唯一、三藏教也、生蘇對_ニ三方等_ニ發_ニ第三味_ニ漸部中有_ニ七教、化儀有_レ三、例_ニ藏可_レ知、化法有_レ四、謂藏等四教也、熟蘇對_ニ般若_ニ第四味_ニ漸部後有_ニ六教、化儀有_レ三即漸等、化法亦三、謂通別円、醍醐對_ニ法華涅槃_ニ第五味也、妙經唯有_ニ開權圓教獨顯一乘、何者為實施權遍_ニ於四味、開權顯實收_ニ攝四味、五時八教、總入_ニ醍醐_ニ涅槃扶律明常、具有_ニ四教_ニ總知_ニ常住_ニ一期化儀出世大事其功畢矣

又、諦観録の成立當時、同時代の源清や、宗昱がどのような教判論を説いたかということは興味ある問題である。

先ず、源清についてみると、太平興國二年(九七七)述の『竜女成仏權實義』(統藏二編五套五冊)には、「示判教相談化意」の章があるが、教判説は詳論されるところがない。しかし、雍熙三年(九八六)述の『十不二門示珠指』同一冊には、次のような教判説が出る。

○然此迹門、談_ニ其因果及以自他、使_ニ一代教門融通入_レ妙、故凡諸義釈、皆約_ニ四教及以五味、意在_ニ開_レ教悉入_ニ醍醐、觀心乃是教行枢機仍且略(六〇b)

○一代者、通指_ニ釈迦出世一化始終_ニ也、二故凡下舉用義以釈成故凡諸等者、明_ニ用_ニ教味_ニ之意_ニ四教謂橫約_ニ化法_ニ別円_ニ五味謂豎約_ニ化儀_ニ頓漸秘密不定華嚴、以_ニ圓兼_ニ別末_ニ施_レ小、故名_ニ頓、在_レ初如_レ乳、鹿苑、但是

小乘經律論三藏、正施レ小名レ漸、次レ乳如レ酪、方等、以レ円對ニ藏通別之漸、次レ酪如ニ生蘇ニ般若、以レ円帶ニ通別之漸、次ニ生蘇ニ無ニ別時部、法華、無ニ兼但對帶ニ之唯一円頓、是顯露非ニ秘密ニ是定非ニ不定ニ純ニ醒醐味也、此則待ニ前三教四味之麤ニ法華得ニ名為ニ妙、相待妙也、若前三教四味、麤人理教行、至ニ法華ニ悉被ニ開顯ニ咸成ニ圓教一味妙人理教行、指ニ除糞人ニ即長者子、開ニ方便門ニ示ニ真実相、決ニ了声聞法ニ是諸經之王、汝等所行是菩薩道、此開ニ麤即妙唯一絕待妙也、今約ニ絕待ニ故、云ニ意在開教悉入醍醐也（六二c d）

○教相分ニ別前之四章、對ニ前四時三教諸部兼但對帶ニ為レ異、玄義云、釈ニ名名異乃ニ至判ニ教教異、五章既是十妙、五章之外更無ニ他本十妙之殊ニ也（六三b）

○若一二晚了、方為ニ圓解ニ法華融妙之旨、則能會ニ諸教諸味之殊途、同ニ於一乘醍醐之圓極ニ也、一期者指ニ仏出世一化ニ也、五時漸頓為ニ縱、四教化法為ニ橫、又三世為ニ縱、十方為ニ橫、指ニ此縱橫ニ只是一念三千世間即空假中（六三b）

○為實施權者、是法不レ可レ示、言辭相寂滅、以ニ方便力ニ故、於ニ一仏乘ニ分別說ニ三、故云ニ不二而二、開權顯實者、雖レ示ニ種種道ニ其實為ニ仏乘ニ開ニ方便門ニ示ニ真実相、故云ニ二而不二、法既教部咸開成妙者、玄義云、通則偏圓、偏圓通、別則偏圓、約レ法、權實約レ教、漸頓根偏者、謂藏通別各有ニ所詮生滅無生滅無量諦緣度心仏衆生十界等法、圓者即中道無作諦緣度心仏衆生ニ無ニ差別ニ、一念十界法也、權者謂藏通別、各有十二分能詮教ニ也、實者即圓十二分能詮教也、部即頓漸四味、兼對帶等部、若偏法、實

若權教、若漸部、至ニ法華時、悉被ニ開顯融會、咸令四開ニ示悟ニ入、仏知見、十方仏土唯一乘法皆到ニ一切智地、一相一味究竟涅槃、故云ニ咸成妙ニ也（六三d—六四a）

○言ニ熏習權實ニ者、此須下約ニ五時教、明ニ種熟脫之緣上、如ニ涅槃置毒之喻、若於ニ過去ニ聞ニ華嚴ニ為レ種、如ニ乳中之毒、今世後聞ニ華嚴ニ宿種成熟、便獲ニ悟入、無明世諦死、法性種智生、如ニ再食レ乳毒發而死、聞ニ藏酪方等生蘇般若熟蘇法華涅槃醍醐、例知、經云、如ニ是衆生世世常受ニ我化、始見ニ我身ニ聞ニ我所說、即皆信受入ニ如來慧、除ニ先修學ニ小乘ニ者、今聞ニ此經、亦入ニ仏慧、此正明ニ種熟脫ニ也（略）此顯ニ法華種熟脫益、如ニ上三世五時悟入、並是法華施開發會之力用（六九c d）

又、義寂門下の宗昱が著わす『注法華本迹十不二門』（玄英序・九九八）には、わずかに次の如き教判説がみえる。

○「況復教相」、五教相一章、亦即本迹十妙之教相、醍醐為ニ今經教相、了了不レ同ニ前諸四味隔別ニ矣、「只是分ニ別前之四章、」名体宗用、「使レ前四章與ニ諸文永異ニ」迹門與ニ前四時ニ有レ同有レ異、本門與ニ前四時ニ永異云云、「若晚ニ斯旨ニ則教有レ帰」、明ニ晚宗旨ニ教不ニ徒絕ニ帰ニ宗趣ニ實、如ニ流趣ニ海、若ニ鳥入ニ山、豈乖ニ醜色ニ、「一期縱橫」、五時曰ニ縱、八教曰ニ橫、「不レ出ニ一念」、不レ縱不レ橫不レ並不レ別（七二d）

○「法既教部」、所說曰ニ法、被ニ下曰ニ教、即八教、部謂頓漸五時部類也、「咸開成ニ妙」、開ニ麤即妙、即純妙無ニ麤、玄義之中、有ニ判麤妙ニ即相待妙有ニ開麤妙ニ即絕待妙開麤之中有ニ案位開、即約理開有ニ昇進開、即約行開、今言ニ教部咸開ニ者、即案位開中兼ニ昇進開、意在ニ絕待妙ニ矣（七三b）

○「九権実不二門者」、化儀四教、頓教唯実、漸秘密不定三教亦
權亦実、化法四教、藏教、一向權、通教、被接有_レ權有_レ實、別
教、教行智權理實、円教、唯實、其體元一、故曰_ニ不二門_ニ矣
(八四 a)

三

そこで次に、前述した全体的な構想については勿論のことであるが、教説内容についてみても、『四教儀』には、何かはつきりとした模範があつたのではなかろうか、ということが問題となる。結論から先にいえば、『四教儀』は、湛然門下の明曠が著わしたとされる『八教大意¹』に、極めて多くのものを紹げていて、その点について、義の三大註は何んらの指摘もしないのであるが、志盤は『仏祖統紀』卷一〇(大正四九・一〇六b)所載の諦觀伝の後に続けて、「此の書は、即ち荊溪(田島徳音は章安と改める)の『八教大意』をば、觀師がほぼ修治を加え今の名に易えたもので、前人の功を没したことは、深く可なりとしない。」と批評している。又、卷二五(同二六〇b)においては、「高麗觀師、四教儀一卷、依章安八教大意刪補」と記しており、『四教儀』は、『八教大意』を刪補したものであると志盤は考えるのである。

しかし、志盤の修治説は、宋順・普寂・黙庵・照遍等によ

つて批判されるところである(田島徳音「四教儀」稿参照)。すなわち、宋順は「觀師にして、若し祖功を泯し、自徳を衒わんと欲するの私意があつたならば、何に縁つてか放光の祥瑞があろうか。故に從義・蒙潤等も四教儀は、或は大部四教、或は妙玄、或は玄義及び止觀等の諸部に依るといい、全く未だ修治して名を易えたとは云わない盤師一ぱら何で之を議するのであるか」(『標指鈔』卷一之一・二右)と評する。照遍は「標指の評破は善美を尽す」(『精義』卷上・五右)と。繼天のは『八教大意便蒙』にも志盤の刪補説に対する批判がみえる。

志盤の説はそのままに肯うことはできないとしても、私は、両書を比較しながら読む限り、志盤の指摘は大筋において正しいと思う。そこで、ここでは便宜的に、組織と教説について両書に共通する部分を対照してみよう。

| 四 | 教 | 儀 | 八 | 教 | 大 | 意 |
|---|---|---|--|---|---|---|
| 1 | 言 _ニ 八教 _者 、頓漸秘密不定、 藏通別円、是名 _ニ 八教、頓等四教 是化儀如 _ニ 世藥方、藏等四教名 _ニ | 分 _ニ 乎八、頓漸秘密不定、化之儀式 譬如 _ニ 藥方 _一 、藏通別円、所化之法 譬如 _ニ 藥味 _一 | 化法、如 _レ 弁 _ニ 藥味 _一 | | | |
| 2 | 第一頓教者、即華嚴經也、從 _ニ 部時味等 _ニ 得 _レ 名為 _レ 頓 _一 此經中云、譬如 _ニ 日出先照 _ニ 高山 _一 | 初言頓者、從 _レ 部得 _レ 名即華嚴也 譬如 _ニ 日出先照 _ニ 高山 _一 、機不 _ニ 經歷、 故名為 _レ 頓、約 _レ 譬次第、以 _レ 初譬 _一 | 初名為 _ニ 乳味 _一 | | | |

(第一時)

涅槃云、譬如如從牛出乳此從
仏出三十二部經（一乳味）
法華信解品云、即遣傍人急追
將還窮子驚愕稱怨大喚等、此領
何義、答諸聲聞在座、如聾若
瘞等是也

3

第二漸教者（此下三時三昧總
名為漸）、次為三乘根性於頓
無益故不動寂場而遊鹿苑、
脫舍那珍御之服、著丈六弊垢
之衣、示從兜率降下、託摩
耶胎、住胎出胎、納妃生子、
出家苦行、六年已後木菩提樹下
以草為座、成劣心身上初在
鹿苑、先為五人、說四諦十二因
緣事六度等教、若約時則日照
幽谷（第二時）若約味則從乳
出酪、此從三十二部經出九部
修多羅（二酪味）信解品云、而
以方便密遣二人（聲聞緣覺）
形色憔悴無威德者、汝可詣
彼徐語窮子、雇汝除糞（略）

4 次明方等部淨名等經、彈
偏折小歎大褒圓（略）若約時
則食時（第三時）、若約味則從

故涅槃云、從仏出三十二部經、譬
從牛出乳
又二乘機生未受大化、雖復在
座如聾若盲、初會俱無見聞之
益、亦名為乳、故迦葉領解云、即
遣傍人急追將還、迷悶墮地等即
第一時也

4

次從鹿苑至于般若、名為漸教、
既二乘全生貴藥、非賤治、不動
九會、脫妙著鉢、貫日託陰納
妃生子、示成鹿苑轉生滅四諦
法輪、小乘生信先度五人、約聾
次第名為酪味、故迦葉領解云、密
遣二人方便附近等、故涅槃云、
從三十二部經出修多羅、譬從乳
出酪即第二時也

5 次說般若、転教付財融通淘汰
(略)約時則禺中時（第四時）、
約味則從生酥出熟酥、此從三
方等之後、出摩訶般若（四熟酥
味）信解品云、是時長者有疾
自知將死不久、語窮子言、
我今多有金銀珍寶、倉庫盈溢其
中多少所應取与（略）已上三昧
對華嚴頓教總名為漸

5

6 次說法華、開前頓漸、會入
非頓非漸（略）約時則日輪當午
馨無側影（第五時）、約味則
從熟酥出醍醐、此從摩訶般
若、出法華（五醍醐味）信解品
云、聚會親族即自宣言此實我
子、我實其父、今吾所有、皆是
子有、付與家業、窮子歡喜得
未曾有（略）

7 第一三藏教者、一修多羅藏、四
第一明三藏教者、仍於法華及
大智度論、對斥小乘得此名也、
阿含等經、二阿毘曇藏（俱舍婆
沙等論）、三毘尼藏（五部律）此
之三藏名通大小、今取小乘三
藏也、大智度論云、迦旃延子自以
聰明利根於婆沙中明三藏義、不
讀衍經、非大菩薩、広破三祇六度權
義、

次明方等大集寶積淨名褒圓歎大
折小彈偏、自悲敗種、約聾次第
論云、迦旃延子自以聰明利根於
婆沙中明三藏義、不讀衍經、
非大菩薩、広破三祇六度權義、

建立自以聰明利根於婆沙
中明三藏義、不讀衍經非
大菩薩、又法華經云、貪著小乘三
藏學者、依此等文故、大師稱
小乘為三藏教、此有三乘根

性初聲聞人、依生滅四諦教、
言四諦者、一苦諦(略)二集諦
(略)三滅諦(略)四道諦(略)

初明声聞位(略)

次明緣覺亦名獨覺、值仏出
世、稟三十二因緣教(略)

次明菩薩位者、從初發心緣
四諦、境、發四弘願、修六度行、
一未度者令度、即衆生無辯誓
願度、此緣苦諦境、

二未解者令解、即煩惱無盡誓
願斷、此緣集諦境、

三未安者令安、即法門無量誓
願學、此緣道諦境、

衍門通別門三大乘觀行 謂四阿含

即修多羅藏、俱舍婆沙即阿毘曇藏、
五部毘尼即是戒藏、此之三藏三乘
同須戒防身口經多詮定、論多

弁慧

聲聞觀於四諦、緣覺觀三十二因緣、
菩薩修事六度、二乘則自調自度、

菩薩乃弘誓、與拔因雖小異、俱析
實陰、而帰但空、

聲聞階位立於七賢七聖不同種種
乃三生六十劫、

次明支仏者、支仏此翻緣覺、若
出無仏世、觀華飛葉落、頓悟、支
仏名為獨覺生於仏世、聞說因
緣頓悟、支仏名為緣覺、並福厚
根利謂四生一百劫所修因也

次明菩薩位者、從初發心緣
四諦、境、發四弘願、修六度行、
一未度者令度、即衆生無辯誓
願度、此緣苦諦境、

二未解者令解、即煩惱無盡誓
願斷、此緣集諦境、

三未安者令安、謂法門無量誓願
學、此緣道諦境、

四未得涅槃者令得涅槃、即
仏道無上誓願成、此緣滅諦境、

既已發心、須行行墳願、於

三阿僧祇劫、修六度行百劫種
相好、言三阿僧祇劫者、且約

糾迦修菩薩道時論分限者、
從古糾迦至戶棄仏、值七萬

五千仏、名初阿僧祇、從此常

離女身及四惡趣、常修六度、然
自不知當作仏、若望聲聞位、

即五停心總別念處(外凡)、次從

尸棄仏至然燈仏、值七萬六千
仏、名第二阿僧祇、此時用七茎

蓮華供養布髮掩泥得受記

前号中糾迦文、爾時自知作仏

口未能說、若望聲聞位即煥

位、次從然燈仏至毘婆尸仏、
值七萬七千仏、名第三阿僧祇

二未解者令解、即煩惱無數誓願
斷、愛見六道衆生二十五有、見思
之縛令得解脱、即緣集諦境而

發心也、

品道諦、自安此緣道諦而發心也、

四未得涅槃者令得涅槃、即
道無上誓願成、此令下六道愛見衆
生、滅三十五有因果証滅諦理上、

此依滅諦境而發心也、

既以發心須行墳願、即三祇
百劫所修六度、從初值糾迦牟尼
至罽那尸棄名初僧祇、從此常

棄至然燈仏、用七莖蓮華供養
布髮掩泥、受然燈記、當得作

仏號糾迦文、爾時自知口亦未說
離女人身、亦不自知當得作仏、

即是外凡五停心總別念位、從尸
棄至然燈仏、為第三僧

祇亦知亦說此是頂法之位修六

度、若過三祇百劫、種福三十二

相百福成一相、福謂相因、福義

多途難可定判、於南洲男身仏
出世時、緣仏身相故得種也、一

云、輪王於四天下自在為一福、
有云如帝糾於二天下自在為一

福、有云、大千人盲治差為一福、有
云、一切人破戒能為說法、令捨

毀禁為一福、有云、不可譬喻、
唯佛能知、入第三僧祇修行大行

有云、大千盲人治差為一福等、
故福難量(問答略)

修ニ行六度ニ各有ニ満時、如下戸毘
王代レ鵠檀満、普明王捨レ國尸満、

修三行六度、各有三滿時、凡有所施而無三遮礙、如三尸毘王代、鵠是檀

經、乾慧等十地即是此教位次也。一乾慧地(略)

屬托他人。詔和三書都無懼。
忍滿、大施太子抒^レ海、竝七日
翹^レ足讚^ニ弗沙仏一進滿、尚闇梨
烏真、貞二、單詩、幼賓、不臣分

女多郎、三打狸貓、化言中ノ
妄語上是名戸満二、如下屬提仙人為三
歌利王割截無レ恨身体平復上是忍
尋情、四大天王之勇者我三、八

龍巢二頂上
禪滿 旬娘大臣分三
閣浮提 七分息
諍智滿上望初声
聞位是下忍位 次入補處一生

辰滿　如大施太子為三詩衆生ノア
海求珠充足窮乏得三珠入手、海神
見其睡即藏其珠、太子覺已、誓

兜率託胎出胎出家降魔安坐
不動為中忍位、次一剎那入上
忍位、次一剎那入世第一位、發三
真無漏、三十四心頓斷見思習
氣一坐木菩提樹下、生草為座
成三劣應丈六身仏、受三梵王請三
転三法輪、度三根性、住世八十年
轉老比丘相、薪盡火滅入無余
涅槃者、即三藏仏果也、

天助レ之海水減半、乃至七日翅足
偈讚、弗沙即精進滿、如_下尚闍黎
仙人入定鳥巢_三醫中_一、待_三子能飛_一方
乃出_上定是名_二禪滿_一、如_下劬嬪大臣
分_二閻浮提地_一而為_二七分_一、息_中國仇
諍_上是般若滿、此訖前百劫並下忍
位也、次入_二補廸_一生_三兜率_一、託_三母
胎_一出生出家降魔、魔軍散已安坐

住禪即中忍成就、次一刹那就入三上忍、次一刹那就入三世第一、次一刹那就發三真無漏、三十四心斷惑証果、十力無畏等皆成就名仏、転三法輪、緣盡入滅、舍利住三世廣福、入天、此是三藏三乘之相(略)

次明二通教者、通前藏教、通後別円、故名三通教、又從二當教得レ名、謂三人同以三無言說道、體レ色入レ空故名三通教、依二大品

次明三通教、通者同也、此教三乘因果大同故名三通教、故經云、欲得三乘、當學三般若、論云、聲聞及緣覺解脫涅槃道皆從三般若得、三人

9 次明二別教一者、此教明二界外

獨菩薩法、教理智斷行位因果、別三前二教、別三後圓教、故名「別也、涅槃云、四諦因緣有無量

明下十住十行十廻向為賢、十地
為聖、妙覺為佛、瓔珞明五
十二位、金光明但出三十地佛果、

勝天王明三十地、涅槃明五行、如是諸經、增減不同者、界外菩薩隨機利益、豈得一定說、然

位次周足莫_レ過_ニ瓔珞經、故今依_レ
彼、略明_ニ菩薩歷位斷証之相、以_ニ

五
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

次明円教者、円名円妙円
満圓足円頓故名円教也（略）
華嚴云、初發心時便成正覺、所

10 次明三円教一者、円名二円妙円

次略明三円教者、円名三円妙、華嚴法界廣大、淨名入不二法門、般若

慧身、不_ニ由_レ他悟、清淨妙法身
湛然心_ニ一切、此明_ニ円四十二位、
維摩經云、蒼鬱林中不_レ喚_ニ余
香_ニ入_ニ此室_ニ者唯聞_ニ諸仏功德之
香、又云入_ニ不_ニ法門、般若明_ニ一
心五行_ニ(略)今且依_ニ法華瓔珞_ニ
略明_ニ位次_ニ有_レ八、一五品弟子
位、二十信位、三十住位、四十首
行、五十迴向、六十地、七等
覺、八妙覺、初五品位者(略)

內以_ニ三觀_ニ觀_ニ三諦境_ニ外以_ニ五
悔、勤加精進助成理解、言_ニ五悔_ニ
者有_レ二、一理、二事(略)

対照することによつて明瞭であるように、『四教儀』は、
形式的にも、内容的にも、『八教大意』を典範としている。
すなわち、儀は大意を一層整理した形で説くが、あるいは要
点となるべき観念を一層明確化してきわだたせるかして、天
台教判の解説を企画しているといいうるであろう。

そこで次下には両書を比較対照して知られる『四教儀』の
特色について整理しておこう。

先ず第一に、冒頭から「五時八教」と標榜し、「五時」、「八
教」各各の概念を規定し、さらには「上来已錄_ニ五味五時化
儀四教、大綱如_レ此、自下明_ニ化法四教」と記す結前生後の文
において明らかであるように、儀では、「化儀」と「化法」が

最上之乘、涅槃一心五行等、並有円
妙法也、此等円妙一理、無_ニ他兼
帶半滿、權覆_ニ於實旨趣_ニ猶_レ隱、今
從_ニ仏意_ニ卷_ニ權歸_ニ實、開顯之円粗
騰_ニ綱要_ニ即以_ニ法華分別功德品末、
明本迹流通如來滅後、五品聞經轉
說起觀行成、以為_ニ凡地_ニ措_ニ心之
四教、亦遍_ニ頓漸_ニ「味之中」_ニと結び、「化儀」から「化法」の
叙述に移行する理由を、兼但對帶純追説追泯の義にかけて説
いていく態度と比較するとき、儀の一層明快な形をとつて整
合化されていく過程が明らかに知られようと思う。⁽²⁾

第二に、華嚴時において、「約_レ部為_レ頓、約_レ教名_レ兼」と
規定するように、儀では部・時・味の觀念を、微妙な意味の
異層において使い分けていることである。この点は、例えば

五味義をもつて五時教に對配する理由を料簡して、1相生次
第の義と、2機の濃淡の義につけて解釈することや、機根の
調熟の場面から、味味得入があることを明示して、いわゆる
通の五時の所在を指示するような、儀の解釈学的な厳密さに
よつて裏打ちされているものといえる。⁽³⁾

第三には、法華時において、儀は超八独妙の開顯の場面を
浮き彫りにしている。大意は「法華涅槃非_ニ頓漸攝」と記し、
「余之六教遍在_ニ漸頓中_ニ、同聽異聞互不_ニ相知_ニ名_ニ秘密教、同聽
異聞彼此相知名_ニ不定教」と続けることによつて、知られる
ように、大意は、頓漸秘密不定の化儀判の範疇を前提にし、
そのわく組みのなかで法華と涅槃の「非頓非漸」をいうので

ある。が、儀では、化儀を前四時に限ると規定し、化儀の意味を基礎づけ、やがてはその意味を収斂する法華の開顕の時を別出することによって、一層法華の「非頓非漸」が鮮明化されている。このように法華時の意味が明確にされるとき、それに相応して、涅槃時の意味も限定され、涅槃時は、1 捉拾教の義と、2 扶律談常教の義との二面から規定されることとなるのである。この点は大意よりは儀の方が一層湛然教学に直接するものであるといえよう。⁽⁴⁾

第四には、藏教において、儀は声聞と縁覚に関する解説を詳細に論じており、その点、大意の簡略な説とは異なり、内容的にも大きく増幅されている。が、菩薩の段は、対照して知られるように、ほぼ大意の説そのままを承ける。⁽⁵⁾

第五には、通教において、前教に通ずる場面で、藏通二教

の違いを、析空と体空の差異によつて明す点は、両書共同じであるが、後教に通ずる場面で、儀は、大意では説かなかつた別接通、円接通を説き、被接義を解説している。通教の開かれた意味が、儀では厳密に把握されているといえよう。⁽⁶⁾

第六には、別教については、儀の説明は、ほぼ大意のそれと同轍の内容であり、とりわけきわだつた展開らしいものはみられぬ。

第七に、円教において、儀が「妙法」の意味を三諦三觀円融相即の場面で解説するのは適切な配慮と思われる。このよ

うな配慮は大意では欠いている。しばしば指摘される、儀における觀門の欠除の問題について考えてみても、儀では、この妙法の段において、觀門の肝要とその所在とを指示しようとする意図が働いているように思われる。

又、「永嘉大師云」として「四住」の説明をする点などは、儀独自の成立事情をしのばせる記事として注意される。

第八に、修行について、儀は、大意では略されていた二十五方便を記している。又、大意が化法の四教に各説していた十乘觀法は、儀では略して、「然依ニ上四教ニ修行時、各有三方便正修、謂ニ十五方便十乘觀法」と記し、本来なら教ごとに解説すべきである方便正修をここでは一括して説く、としている点は、儀が大意の解説を下敷きにし、その繁重を去つて簡明についた消息を伝えるものといえよう。

1 『八教大意』の撰者を明曠と決したのは、繼天の『天台八教

大意便蒙』二卷（寛政四年刊）である。そして今日では明曠撰

述説は概ね定説とされている。上杉文秀は「さて『八教大意』にはいいごとがある。此は決して章安の作ではない。荊溪の門

人明曠の撰である。今の藏中にも章安の撰としてあるが、其源は義天目録が誤ったので、それを亦、仏祖統紀が伝えて、終に此誤謬を來したのだ。亦明曠を章安の門人としたのも統紀者が誤ったのである。此書の著者に就いては繼天の八教大意便蒙に調べてある。されば比八教大意は是非とも章安の著作目録からは删除せねばならぬ。」（『日本天台史』 続七六八頁参照）と説

く。又、中里貞隆は「本書は首に隋天台灌頂撰とあり、最後に天台釈明曠一録とある所より、志盤の仏祖統紀は本書を章安の作とし、其の弟子明曠の録受せるものとした。然るに日本の繼天は八教大意便蒙を著わし、其の中に五証を挙げて本著を六祖湛然已後の著作となし、且つ明曠を湛然門下と定め、本書は灌頂の撰にあらず、湛然門下明曠の作にして、灌頂の撰号は後人の添加なりと断じたが、恐らく正鵠を得たものであろう。」(『仏書解説辞典』「天台八教大意」の項参照)と説く。私も先きに、『八教大意』の教説を、『金剛鉢論私記』、『菩薩戒疏刪補』の教相玄義に出る教判論と対照して読んでみたが、三著は近密な関連を有するものであることが知られ、『八教大意』の明曠撰述説を別の視点で再確認した次第である(拙稿「湛然以後における五時八教論の展開」参照)。因みに、遵式は、『天台教観目録』(一〇二九刻石)で、「八教大意一卷、南嶽記一卷、天竺寺真觀法師伝一卷、已上三卷頂禪師撰闕本」と記し、灌頂撰述説を採る。したがって、当時の諦観自身の問題にもどしていえば、彼が『八教大意』を湛然下の明曠のものとして認めていたかどうかは当然別の問題となる。

2 前節註5を参照。

3 この点については例え、『義例』では、「名義通局、如置毒譬、經中唯譬、五道不同仮性不_レ変、五味唯喻、一代五時濃淡、濃淡雖殊皆從牛出」(大正四六・四四九a)と説くが、処元は『義例隨釈』(一一〇四述)で、「五味譬者、文云、五味唯喻、一代五時濃淡、濃淡雖殊、皆從牛出、予疑此文恐誤、応_レ云、五味唯喻、一代五時相生、相生雖殊、皆從牛出(略)由此而知、

譬_ニ於相生、決無_レ疑也、若譬_ニ濃淡者、則使_ニ華嚴頓教反却為_レ淡淡苑半小而却為_レ濃、於_レ義不_レ便(略)」と訂正し、「應_レ知相生喻_レ教、不_レ同_ニ濃淡、濃淡喻_レ人、不_レ同_ニ相生」と決している。處元の『隨釈』は、従義の『纂要』を踏まえ、『纂要』に対する批判論として著わされるのであるが、處元が又諦観録を研究していたことは、「天台以_ニ五時八教判_ニ釈一代聖教靡_ニ有_ニ遺者」などと記することによって徴されるのである。『義例』の説を訂正する處元の立場が、諦観録の研究を通して確認された処であろうことは単なる推定にとどまらないであろう。義真の『宗義集』(大正七四卷所収)では次に列挙するような説がみえるが、対照してみると諦観録の説明は一層要領を得て簡潔であることが知られる。

○寂光本覺寄_ニ五時_ニ而明_ニ幽微_ニ故列_ニ五味之濃淡、或明_ニ說教之次第_ニ(二六八b)。

○問、以_ニ五味_ニ譬_ニ何等法、答、譬_ニ說教之次第_ニ(同)。

○問、華嚴是頓教大乘、何故譬_レ乳、答、不_レ取_ニ濃淡、但以_レ初譬_レ初耳(同c)。

○問、五味之與_ニ五時_ニ有何別_ニ耶、答、五味即是五時也、但有_ニ法譬之別_ニ耳(同)。

○問、一代教門咸攝_ニ四教、何故更立_ニ五味、答、四教約_ニ機理淺深、五味明_ニ說教次第、凡約_ニ四教五味、釈_ニ諸義理者、意為_レ顯_ニ法華起_ニ一代之教_ニ故也(同一一二六九a)。

又、明曠の『金鉢論私記』の「五時約_レ会、八教隨_レ機」(続藏二輯五卷三冊_ニ四五b)というような理解の仕方に較べて、諦観録の教説がより適格であることを知るのである。

4 諦觀錄が強調した法華非頓非漸の義は、湛然の超八法華の立場を承けるものであることは確かであるが、湛然門下の人たちが皆が皆この説を自明のこととして肯ったわけではない。例えれば行滿（八二三）は『学天台宗法門大意』（続藏一輯五套四冊）では、「法華一乘開前四味一會三帰一、無_レ非_ニ仏乘、成_ニ醍醐教獨得妙名」（四〇一-a）というだけであり、又、智度は『法華經疏義續』（続藏一輯四五套三冊）に、「今經但說如來布教之元始、中間取與漸頓適時、大事因緣究竟訖」と記し、「此經唯論如來設教大綱不_レ委細綱目」と記して、智顥の教判論の立場を繰り返すだけである。さらには智雲は、『文句私志記』（続藏一輯四五套四冊三七八b-d）において、法華を八教の内だと外だと、あるいは内でもあり外でもあるとか議論があるが、これは根性の融不融の義を理解しないから起つたことであると批判し、「如何弁五時之要會遂_ニ八教之差殊、皆法華涅槃之極談、乖_ニ玄義諸文之至説便後學增諸諍論失_レ之豈不_レ甚哉、都由_レ迷於五時之宗、貪_ニ彼八多愛_ニ此一妙」と断じている。法聰は『釈觀無量寿仏經記』（続藏一輯三一套四冊）で「妙經唯有開權圓教獨顯一乘、何者為實施權遍於四味、開權顯實收攝四味、五時八教、總入醍醐」というのみである。撰者未詳の『止觀科節』（続藏一輯二編四套二冊）では、「約_レ部法華唯圓、無_レ復兼但對帶、會_ニ諸權小_ニ歸_ニ一乘_ニ故」と説く。しかるに、日本の円澄（七七一一八三七）の疑問に答えた広修（七一一八四三）の唐決には、「法華是顯露、非_ニ前七之中有_ニ」「言下此經亦為_ニ頓漸化儀所_ニ攝奪非_ニ八者、亦應_レ言_ニ七」などと。又、維

5 儀が大意と完全に異なるのは、藏教の声聞と縁覚の下に説く法數解釈だけである、といつてもあながちいいすぎではない。儀がこれらの解説の典拠をどこに求めたかは、塩入良道訳註『天台四教儀』脚注を参照されたい。

6 明曠以外の、湛然下の人たちの教判解説でも、被接義は重視されず、まとまった説はみえない。しかし、我が国の義真の『宗義集』や、源信の『四教略頌』では、被接義を説くことを忘れない。

最後に

前來、考観したように、諦觀録『四教儀』は、湛然教学を大前提に踏まえながら、『八教大意』の教説内容と、その解説法に準拠し、彼自身の教判研究において見えていた、天台智顥の教判組織とその宗教の原理を整理して解説した書物であると結論することができよう。天台教判の概説書として、『四教儀』は、彼の前にも、彼の後にも、これほど簡潔に平易に、しかも要を得て叙述されたものはなかつたといつてよいのである。「抄録本のすべては、必ず原本を誤読し、幾多の謬説を出すのが一般であるのに、本書は全く誤謬がない。これは諦觀法師の天台学が如何に正統学系、即ち天台の原流に達していたかを示すものである」（田島徳音稿「四教儀」『仏書解説辞典』参照）という評もそのような意味で、あながち讃め過ぎであるとはいえない。

しかし、後世に及んで、おびただしい諦觀録研究の流行の一時期が訪れ、天台教学の研究が諦觀録の研究で終れりとするかのような安易な風潮を兆すにいたると、果して「天台的根本教学は何か」と問う自己の信仰的立場をも的にして反省するような、そのような研究態度を枯渇させる結果を惹き起すにいたるであろう。智旭の批判や、我が國の敬光などの批判は、この限りで正しい。しかし、そのことは、決して諦觀

と『四教儀』の責任に帰せられるべき問題ではない。本論で明らかになつたように、諦觀録の成立には、そのようにでなければすまぬ、教學的な展開の必然性があつたからである。そしてさらにいえば、単純で明快なものがもつエネルギーのようなものが、『四教儀』にはある。だが、シンプルなものが、単純な事実としてのみ学ばれ、無反省に繰り返えされているだけであれば、そのような学習法は、教条主義的なものになり、形式的な理解に成り下り、真に生きているものが、それである限りもち続けるはずと思われる、限りない静謐な時間のただずまいによみがえる、安らいだ豊かな宗教的な意味は終にくみ上げることはできないであろう。それ故に、我々は、単純なものに結果したその消息に深くたち入り、用心深く想いを致さなければならぬのである。要は、常に祖文祖釈に照らして、諦觀録に整理され来つた教學の道ゆきにある意味をできるだけ深く掘り起す努力を怠つてはならないということなのであろうと考える。このような努力を怠るならば、教學の研究は無味乾燥の仕事になるに違いないと思われるからである。（昭和五〇年一〇月稿）